

3 吉野作造記念館の 常設展示を見てみよう



(ライ造くんは吉野作造記念館の公式キャラクターです)

*ここで紹介する展示内容・資料は2025年12月時点のものです。

Aブロック

Bブロック

② ジャーナリズムでの活動

キリスト教（プロテスタント）信仰

① 学者としての活動

スクリーン

Cブロック

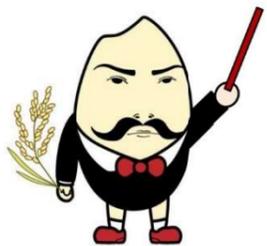
④ 社会運動家としての活動

③ 国際的な活動

Dブロック

入
口

時計回りに見るとわかりやすい。



Aブロック

◇展示室入口前ハイケース & 展示室入口年表前◇

- ・ 吉野作造書軸「人世に逆境は無い」 / 吉野作造書「花紅柳緑」 / 吉野作造胸像(斎藤素厳作)

ここでは政治史学者としての吉野作造を育てた時代状況、学問状況が紹介されます。日露戦争後～大正時代にデモクラシーを求める社会の風潮が強まると同時に、学問の世界でもデモクラシー的な政治学・法学が発展します。また、それに対する反発も当然起こります。小野塚喜平次による近代的な政治学の確立、また美濃部-上杉論争は、吉野の登場と同様に大正デモクラシーの時代状況を象徴する出来事です。

① 学者としての活動

政治学者としての吉野作造

—高まる民衆のちから

日露戦争は日本に大きな変化をもたらした。日本はロシアに対して勝利をおさめた。しかしポーツマス講和会議では、朝鮮支配や鉄道権を確保しながらも、賠償金を得ることはできなかった。戦争中、度重なる増税に耐えてきた民衆は不満を爆発させ、内務大臣官邸や政府系の国民新聞社を焼きはらう日比谷焼打事件をひきおこした。また国家のあり方に疑問をもつ学生や一般大衆もあらわれ始めた。

かくして大正はじめ(1912~13年)の第一次**憲政擁護運動(大正政変)**では、ついに民衆運動が内閣をたおしたのである。政治学徒としての吉野の登場は、このような激動の時代を背景としていた。

◇展示資料◇

- ・ 吉野作造『ヘーゲルの法律哲学の基礎』1905年
- ・ **Pickup!** 吉野作造「学術上より観たる日米問題」『中央公論』1914年1月
- ・ 吉野作造「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」『中央公論』1916年1月
- ・ 吉野作造『現代の政治』1915年

政治学者への道

—東京帝国大学での学問形成

1900(明治33)年、吉野は22歳で**東京帝国大学**の法科大学に入学した。そこで学問の師となる**小野塚喜平次**にであう。小野塚は政治学を国を治めるための「国家学」ではなく、国民生活を向上させるための方法として考えた。吉野はこの考え方に大きな影響を受けた。

法律学では**美濃部達吉**が、天皇は主権を持つが、国家によってその権力は制限されるという「**天皇機関説**」を「憲法講話」(1912、大正元)で主張した。これに**上杉慎吉**が反論し、広い範囲での論争が展開された。大正時代を通じて、美濃部の学説は大きな支持を受けた。

吉野の「民本主義」は、この美濃部の天皇機関説を政治学上にあらわしたものともいえる。

② ジャーナリズムでの活動

民衆のための政治

—「民本主義」の発表

1916(大正5)年、雑誌『**中央公論**』に吉野は長大な論文「**憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず**」を発表した。これは吉野の欧米留学(1910~13年)の大きな成果であり、当時の知識人の間に波紋をなげかけた。吉野は、「**民本主義**」は国民を政治における主権者とする「**民主主義**」とはことなり、近代のどのような国家にも存在しうる共通の精神であるとした。それは**政治の目的を一般民衆の利益とすること、また政治をおこなう際、民衆の意見を尊重すること**を柱としていた。そして日本の政治における具体的な方策として、**政党内閣**と、**普通選挙制**の実現を主張した。

このように、吉野は明治憲法の天皇主権の枠組みをそのままにして、実質的な民主主義を政治の上に実現させようとしていた。この論文は、力を高めつつあった民衆運動に対する政治学からの支えとなったのである。



ここでは政治史学者としての吉野作造の学問遍歴が紹介されます。留学経験を活かしたヨーロッパ現代政治史から、後半生の日本の国内政治史へ——吉野作造の政治史研究は、人類共通の理念であるデモクラシーの発達の道筋を解き明かそうとするものでした。また後述するように、吉野は中国革命史の研究にも取り組みました。政治史学者・吉野は、デモクラシーの発展史という、ヨーロッパ～アジア・日本を俯瞰する壮大な視点を持っていたのです。

① 学者としての活動

歴史家としての吉野作造 —世界の動きに対するするどい観察

吉野の「民本主義」の主張は、同じ時代の欧米や中国の動きへの強い探究心に裏づけられていた。中国の軍閥袁世凱の息子の家庭教師として、家族をつれて中国に滞在（1906～09、明治39～42）したことや、3年間の単身での欧米留学（1910～13、明治43～大正2）が、吉野の国際社会への関心を高め、視野を拓けたのである。これ以後、吉野は国内のみでなく、欧米や中国を中心とする世界の動きにふかい関心を持ち続けた。

「書物」より「街頭」へ —欧米留学における研究と成果

3年間にわたる欧米留学で、吉野は多くのことを学んだ。大学で講義を聴いたり研究書を読んだりするかわら、街頭に出て直接、目と耳で政治の現実をとらえようとした。そして労働者のデモやストライキを間近に見たり、デモクラシーの実現とキリスト教精神との関連について、思索をめぐらせたりした。そうして世界全体の動きを全身で感じとったのである。

帰国後、オーストリア皇太子夫妻の暗殺（サラエボ事件）を契機にヨーロッパ全土をまきこんだ**第一次世界大戦**（1914～18、大正3～7）が始まった。吉野は留学の際、買い集めた雑誌や新聞をもとに、大戦の歴史的背景をまとめた。この『**欧洲動乱史論**』（1915、大正4）は、ヨーロッパ体験を十分にもりこんだ吉野の欧米現代史研究の会心の作であった。

明治文化研究者としての吉野作造 —アカデミズムから在野史学へ

1923（大正12）年の**関東大震災**はあらゆるものを灰と化した。明治期の資料が失われることへの危機感から、1924（大正13）年11月、吉野は尾佐竹^{たけき}猛や石井研堂、**宮武外骨**ら、民間で活躍している研究者たちと**明治文化研究会**を組織した。研究会では、それまで学問としてはほとんど研究されてこなかった、明治期の政治から風俗までさまざまな事柄を調査した。そしてその成果を、毎月11日の例会と機関誌『**新旧時代**』、『**明治文化**』などに発表して、明治研究の気運を高めた。やがてそれは日本近代史研究の基礎をつくった『**明治文化全集**』（全24巻、現在は増補されて全32巻）へと実をむすんだ。

デモクラシーの根拠をさぐる —吉野作造と明治文化研究

1924（大正13）年2月、吉野は東大教授を辞めて朝日新聞社に編集顧問兼論説委員として入社し、4ヶ月後に退社した。これを機会に吉野の明治文化研究は本格化する。この研究のなかでとりわけ吉野が関心をしめしたのは、キリスト教などの西洋文化が明治文化に与えた影響、明治憲法制定過程、自由民権運動史などである。吉野は研究会に欠かさず出席して話題を提供し、もともとの本好きも高じて古本市に通いつめるなど、この研究に心血をそそいだ。これらの研究を通じて得られた成果は『**明治外交史の一節**』、『**我国近代史における政治意識の発生**』などにまとめられていった。

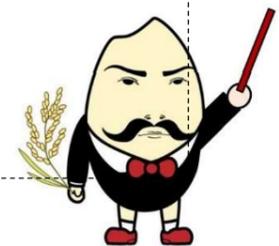
吉野にとって明治史の研究は、単に資料の散逸をふせぐためのものではなく、大正デモクラシーは日本の歴史にとって当然の道すじであったことを、誰の目から見ても明らかにすることを目的とする実践的な活動であった。



◇展示資料◇

- ・ 吉野作造『欧州戦局の現在及将来』1916年
- ・ 吉野作造「ローマ法王の更替」『新女界』1914年〔復刻版〕
- ・ 吉野作造「スタイン、グナイストと伊藤博文」『閑談の閑談』1933年
- ・ 吉野作造「明治外交史の一節—岩倉大使日米条約改正談判始末」『社会経済体系』1928年

具体的な研究対象は、ヨーロッパから日本へと移っていったんだ。



Bブロック

ここでは、吉野作造が「民本主義」を唱えて一躍時代の寵児となる、大正デモクラシーの時代の言論メディアの状況が紹介されます。

『中央公論』に代表される総合雑誌の隆盛は、大正デモクラシーの時代には世論が大きな力を持つことを示しました。一方、社会主義から国家主義的な思想まで、様々な思想が現れては激しく対立する時代になりました。

吉野は、そうした新しい言論空間の中心にあって、デモクラシーを論じて広く世論の支持を集めたのです。

総合雑誌の時代の到来 —吉野作造と滝田樗陰ちよいん

大正期には映画やラジオなど新しいマスメディアが登場し、大衆の文化をかたちづかった。出版界でも、吉野作造や大山郁夫などの政治評論と谷崎潤一郎や永井荷風などの人気小説が一つの雑誌をかざる、日本特有の総合雑誌の出版がさかんになった。

吉野の主舞台となった『中央公論』も当時よく読まれた総合雑誌のひとつであった。『中央公論』における吉野の文章は、名編集者滝田樗陰ちよいんとの合作であった。旧制二高の後輩である滝田は、時評欄をもうけて吉野を迎えた。原稿の作成には、滝田が吉野に問題をもちこみ、意見を闘わせて議論をふかめ、時には訂正などをおこなって完成した。こうして話しことばに近く、わかりやすい吉野の文章が生まれたのである。

「民本主義」をめぐる —論壇をにぎわせた論争

吉野は1916（大正5）年1月に『中央公論』にいわゆる「憲政の本義」論文を発表した。また1918（大正7）年には政治参加としての民本主義を強調した「民本主義の意義を説いて再び憲政有終の美を済すの途を論ず」を掲載した。

これらの論文は各方面でおおきな反響があった。民衆運動のたかまりを背景として、当時の知識人のおおきな関心をよんだのである。上杉慎吉は天皇だけが政治を行うべきだと主張して吉野に反論した。一方、山川均は吉野の議論がはっきりと民主主義を主張していないことを攻撃した。また茅原華山は吉野の民主主義と民本主義の使い分けを問題にした。しかし大山郁夫のように、吉野の「民本主義」に共感するものもあらわれ、その輪はひろがっていった。

② ジャーナリズムでの活動

言論人としての吉野作造 —よりよき政治をもとめて

大正時代の知識人のなかには、大学の研究室から街頭に出て民衆の声に耳をかたむけ、語りかける人たちがあらわれた。吉野はそのなかでも、身の危険をかえりみず時の政治を果敢に批判し、啓蒙をこころざした代表者である。1916（大正5）年以降の「民本主義」論争から第一次世界大戦直後までは、吉野の言論活動がもっともさかんな期間であった。その議論の進めかたは、政治に対する大きな理想を胸にいだきながら、現実のなかでできることは何かを考え、一步一步着実に理想をめざそうとするものであった。



言論の自由をもとめて —浪人会との対決

吉野は「民本主義」の実現のためには言論の自由が必要と考え、政府当局の言論弾圧を批判しつづけた。その戦いのひとつが右翼の浪人会との立会演説会である。これは政府の言論弾圧を非難した大阪朝日新聞が当局から告発され、社長が浪人会に襲われるという事件（白虹事件はっこう）に対し、吉野が浪人会のやり方を批判したところから発した。

1918（大正7）年11月23日、当時の貸席だった東京神田の南明倶楽部を会場として吉野と浪人会との論戦がおこなわれた。この演説会には吉野を応援するために学生、労働者達が会場に押しよせ、入りきれなかった者には鈴木文治が場内の様子を大声で伝えた。演説会が夜10時すぎに終わると、吉野の周りに熱狂した人々がおしよせ、歩くこともままならなかったという。この演説会は大正デモクラシーの頂点をしめす歴史的大事件となった。

政治における特権廃止のさけび
—貴族院・枢密院・軍部批判
⇒次ページへ。

② ジャーナリズムでの活動

政治における特権廃止のさけび — 貴族院・枢密院・軍部批判

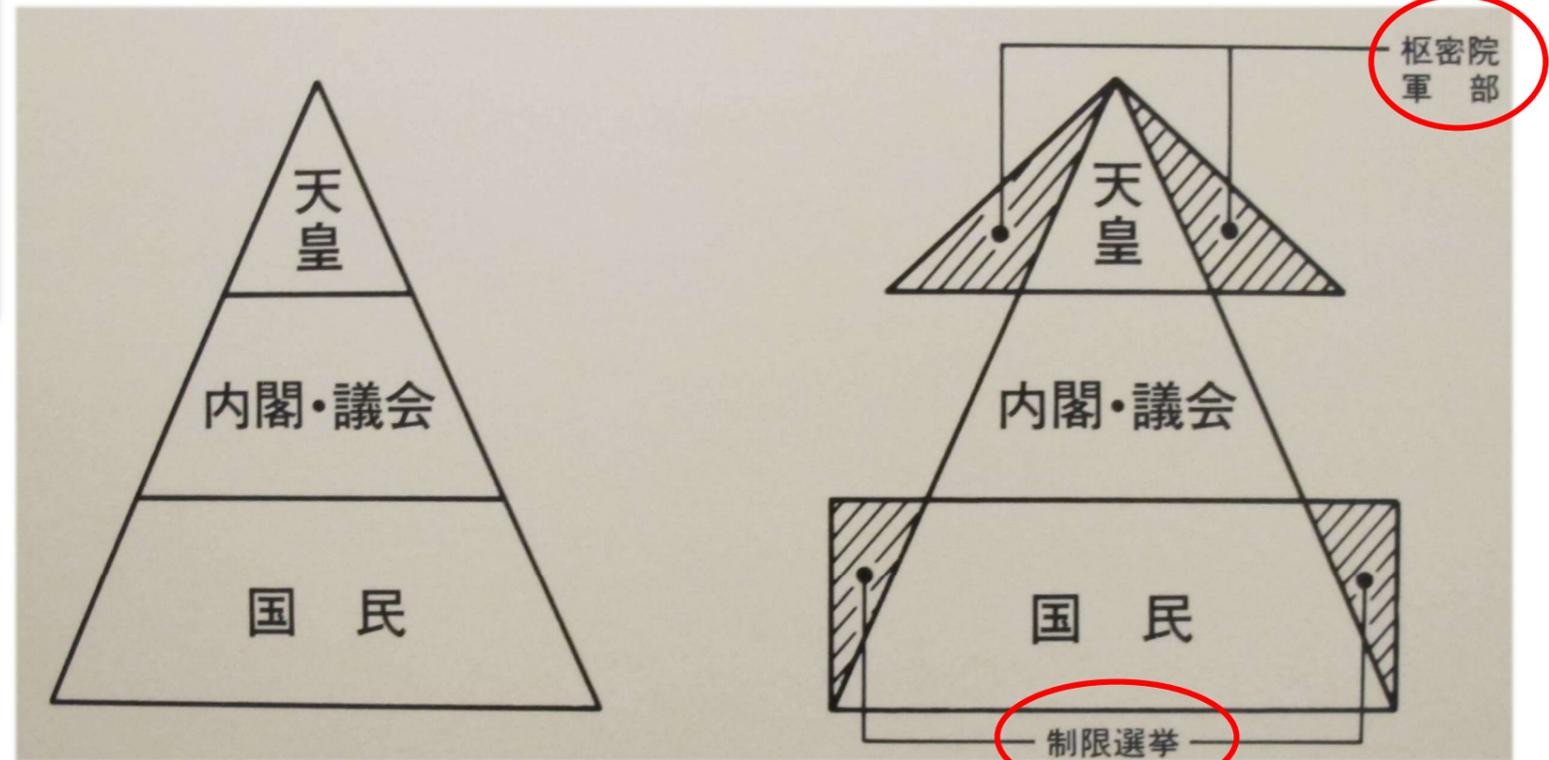
第一次世界大戦後、吉野は世界の動きに逆行するような日本政府に対する批判を、ますます強めた。それはついに明治憲法下の政治機構にまでおよんだ。吉野は議会中心主義をさまたげる**貴族院**、**枢密院**の存在そのものを批判し、その改造を主張した。また軍部が議会を無視して天皇に請願する**帷幄上奏**を批判し、軍部を国民の監視下におくための改革案をあきらかにした。

このように吉野は政治の機構の問題にふみこみ、民主的な政治をさまたげる特権的な政治機構をきびしく批判した。このため一部の人から「危険」視され、結果的には、入ったばかりの朝日新聞社（1924年2月）の退社に追い込まれることになったのである。

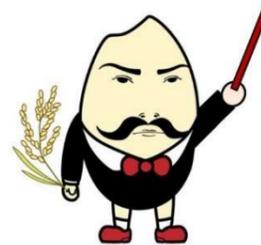
国民に選ばれた議員で議会在構成され、その中の多数の勢力（政党）が内閣を組織すれば、内閣は国民に根拠を持つことになります。その内閣の大臣が、形式上天皇を「**輔弼**」することで、実質的に政党政治が行われます。吉野はこれを「憲政」の精神（デモクラシー）に適った政治体制だと考えました。

しかし、実際には軍部や枢密院といった勢力が、議会・内閣を経由せず直接天皇に結びついていました。また、普通選挙が行われない状態（制限選挙）では、議会と内閣はすべての国民に根拠を持つことになりません。

これらの問題のうち、軍部が内閣を経ないで直接天皇に上奏ができること（「**帷幄上奏**」）を、吉野作造は特に厳しく批判していました。



左図のきれいな三角形が、吉野作造の考える立憲主義的な政治体制。これに対して右図では、斜線部分が立憲主義的な政治体制からはみ出してしまっているよ。



左図：吉野が考えた理想的な政治のあり方

右図：当時の日本政治のあり方

（参考：吉野作造『二重政府と帷幄上奏』1922年）

③ 国際的な活動

Cブロック /ピックアップ資料①

日本の対中国・朝鮮政策は、第一次世界大戦後の民族主義(「民族自決」)の隆盛の前に矛盾を隠しきれなくなります。これに対し吉野作造は、キリスト教的な博愛の精神から、他民族への敬意・尊重を第一として相互理解・交流に努めました。

対中国・朝鮮関係について多くの論説を新聞雑誌に書き、世論の喚起に努めたほか、研究者としても中国国内の政治情勢の研究(中国革命史研究)に取り組みました。

国際主義者としての吉野作造 —平和な世界のために

第一次世界大戦は「軍国主義」国ドイツを中心とする同盟国側に対する、アメリカ、イギリスなど連合国側の勝利によって幕を閉じた。そこでこの戦いの結果は当時「デモクラシーの勝利」といわれた。戦後、世界初の国際組織「**国際連盟**」がうまれた。一方、日本は大戦で莫大な利益を得て、植民地をさらに広げようとしていた。こうしたなか、吉野は各国の国際協調の動きにおおいに共感をよせ、日本の中国、朝鮮への軍事力にうったえた政策をきびしく批判することになった。

となりの国への理解と交流 —吉野と中国との関わり

吉野と中国との関わりは1906(明治39)年、当時の軍閥袁世凱^{えんせいがい}の息子の家庭教師として3年間滞在したことからはじまる。しかし中国の革命運動への関心をしめしたのは、1916(大正5)年、いわゆる第三革命^{どうてん}のときからである。そして革命派王正廷や宮崎滔天^{どうてん}の『三十三年の夢』などの影響によって書いた『支那革命小史』は日本人の最初の中国革命史研究となった。

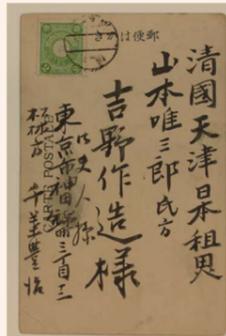
1919(大正8)年5月4日、日本が大戦中に出した「対華21ヶ条要求」の講和会議での扱いに対し、北京の学生が抗議運動を起こした(五^ご四^し運動)。この運動に対しほとんどの日本の新聞は批判的な反応をしめしたが、吉野はただひとり運動に共感をよせた。そして両国の教授学生の交流を企画し、1920(大正9)年5月、北京大学の高一涵と五人の学生の来日が実現した。

民族独立への共感 —吉野と朝鮮との関わり

1919(大正8)年3月1日、ソウルでは民族独立運動(三^{さん}一^{いつ}独立運動)がおこった。当時朝鮮は日本の支配下におかれ、言論や政治参加がきびしく制限されていた。第一次世界大戦後、民族独立が世界中でさげばれ、朝鮮の民衆も立ちあがったのである。日本政府は朝鮮に軍隊を派遣してきびしい弾圧をおこなった。

これに対し吉野は、日本の武力による統治政策の廃止を強く求め、朝鮮での言論の自由や差別の撤廃を主張した。そしてこの運動が朝鮮という一国にとどまらない普遍的な正義に支えられていると考えた。

吉野は、1923(大正12)年の関東大震災直後におきた朝鮮人虐殺事件の際にも被害者の調査活動をおこない、朝鮮人の世話をするなど、日常生活でも援助や支援を惜しまなかった。



清国天津日本租界
山本唯三郎氏方
吉野作造様 御夫人様
東京市神田錦町三丁目十二
松林方 千葉豊治

祝御安着
昨夜一寸御尊宅ヲ御訪問仕候のぶ子様モ
あき子様も皆御壮健ニ候
二三日以前古川ニ参り候 古川ニモ皆様御変
り無く御両親様等ハ益々御壮健ニ候
御地ノ寒サ一入ト存ジ候 御撰養被遊度
候 先ゾ不取御祝マデ
敬具

吉野作造宛千葉豊治葉書 1906年(明治39)2月頃

千葉豊治(1881~1944)は古川出身の吉野の友人。宮城農学校から早稲田大学に進学、上京後は吉野と同じ本郷教会でも活動しました。アメリカ留学後、カリフォルニアの日本人移民向けの邦字新聞「日米新聞」で記者となり、アメリカにおける排日移民問題の歴史的・社会的背景について吉野に研究材料を提供したこともあります。展示のハガキは、袁世凱の子・克定の家庭教師として天津に赴任した吉野に、任地への無事到着を祝いつつ日本に残った家族の健康を知らせたもの。

◇展示資料◇

- ・ 孫文書額「天下為公」
- ・ 唐紹儀書軸「翻手作雲覆手雨…」

◇展示資料(テーマ展示:吉野作造と東アジア)◇

吉野作造『支那革命小史』1917年 / 戴季陶色紙「漁翁詩」 / 丘仰飛色紙「致曾國藩五首」第三首、1919年 / 張継色紙「秋心三首」第一首 / 「道力戦萬籟」 / 吉野作造「民族と階級と戦争」『中央公論』1932年1月 / 吉野作造「朝鮮統治の改革に関する最小限度の要求」『黎明講演集』1919年8月 / 吉野作造「対外的良心の發揮」『中央公論』1919年4月 / 吉野作造宛千葉豊治葉書、1906年(明治39)2月頃



* 浮島になっているガラスケースでは、吉野作造や関係人物の直筆資料、その他重要資料を多く展示しています。

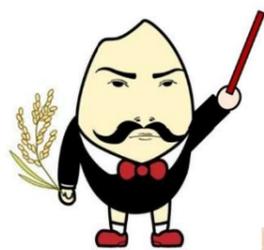
ここでは吉野作造のキリスト教信仰について紹介されます。自由と平等を希求するキリスト者としての信仰が、吉野のあらゆる思想と行動の基礎となっています。特に東京大学学生基督教青年会（YMCA）から派生した各種の社会事業は、新しい相互扶助の形を模索する近現代社会の課題を先取りした取り組みへと発展し、その歴史的意義は今日なお注目されるべきものです。

◇展示資料◇

Pickup!

- ・ 吉野作造原稿「魂の共感」（『文化生活』1922年1月所収）
- ・ 藤田逸男『賛育会物語』1953年
- ・ 吉野作造原稿「人か組織か」（『賛育会ニュース』1932年10月所収）

「科学と宗教との衝突」を乗り越え、社会貢献に向かう——
吉野作造は、明治時代に生まれた一人の青年として、
人生の指針をキリスト教に求めたんだ。



キリスト教（プロテスタント）信仰

キリスト者としての吉野作造 —大正時代とキリスト教

大正時代には各方面で多くのキリスト者が活躍した。大山郁夫や賀川豊彦、武者小路実篤や有島武郎、羽仁もと子などは、政治思想から労働運動、文学、教育まで多彩な活動をくりひろげた。かれらがキリスト教から得たのは、正義、愛などさまざまであったが、その文章や活動のいたる所に普遍的で国際的な精神をうかがうことができる。吉野の思想、行動の根底にあるものは、やはり若い頃に培ったキリスト教精神であった。それは吉野の人格に大きな影響をあたえ、日常生活においても発揮された。

④ 社会運動家としての活動

社会事業家としての吉野作造 —よりよき社会をつくる

第一次世界大戦後、労働運動や革命への志向が強まると、知識人や華族のなかから、貧しい人々に対して社会事業をおこなったり、理想郷の創造をめざす人々があらわれた。武者小路実篤の「新しき村」、宮沢賢治の羅須地人協会などがそのような活動の例である。

吉野もまた、東大キリスト教青年会理事長就任をきっかけとして、さまざまな社会的事業に関わるようになった。それらは社会問題の解決に糸口をあたえ、その精神や考えは現代にも生きつづけている。

ユートピアへの模索 —賛育会とセツルメント活動

1917（大正6）年、吉野は東大キリスト教青年会の理事長となった。その指導のもとに、社会事業への進出が決定され、大学青年会病院、翌年には日本最初の法律相談所、さらに翌年には食料品を共同購入する家庭購買組合が結成された。大学青年会病院は河田茂と藤田逸男によって、母性と小児の保護救済のための産院、「賛育会」に発展した。吉野はその理事となり、設立直後には貧民街の視察や、健康や生活改良に関する講演など、セツルメント活動をおこなった。また1926（大正15）年には賛育会理事長に就任、会の事業の中心を慈善事業から社会事業に変えるなど、さまざまな点で活躍した。

理性と信仰との調和をもとめて —科学と宗教の問題

吉野のキリスト教との出会いは中学時代に仙台で聴いた押川まさよし方義の講演にさかのぼる。旧制二高時代に、アメリカ人宣教師で尚絅女学校校長のミス・ブゼルの聖書購読に参加したことは入信のきっかけになった。1898（明治31）年7月、吉野は仙台の浸礼教会で受洗し、キリスト者となった。

東京帝国大学入学後は、アメリカン・プロテスタント一派の組合教会派である弓町本郷教会牧師海老名だんじょう弾正にであい、雑誌『新人』の編集を手伝ううちに海老名から大きな影響をうけた。海老名は、キリストの復活などの聖書の奇跡物語を、当時の人々の信仰に即した比喩的・象徴的表現を用いたものとして、合理的な解釈をほどこした。それは当時、吉野をふくむ青年信者が直面していた「科学と宗教との衝突」、理性と信仰との調和という問題に、解決の糸口をあたえたのである。



ここでは吉野作造と郷土宮城との関係、また家庭人としての吉野が紹介されます。吉野は「古川学人（こせんがくじん）」というペンネームを用いるなど、郷里・古川をいつも意識していました。また、旧制中学校～旧制高校を通じて出会った同郷宮城県の友人たちは、後に大正デモクラシーの旗手となる吉野が人生行路をともにする仲間となっていたのです。

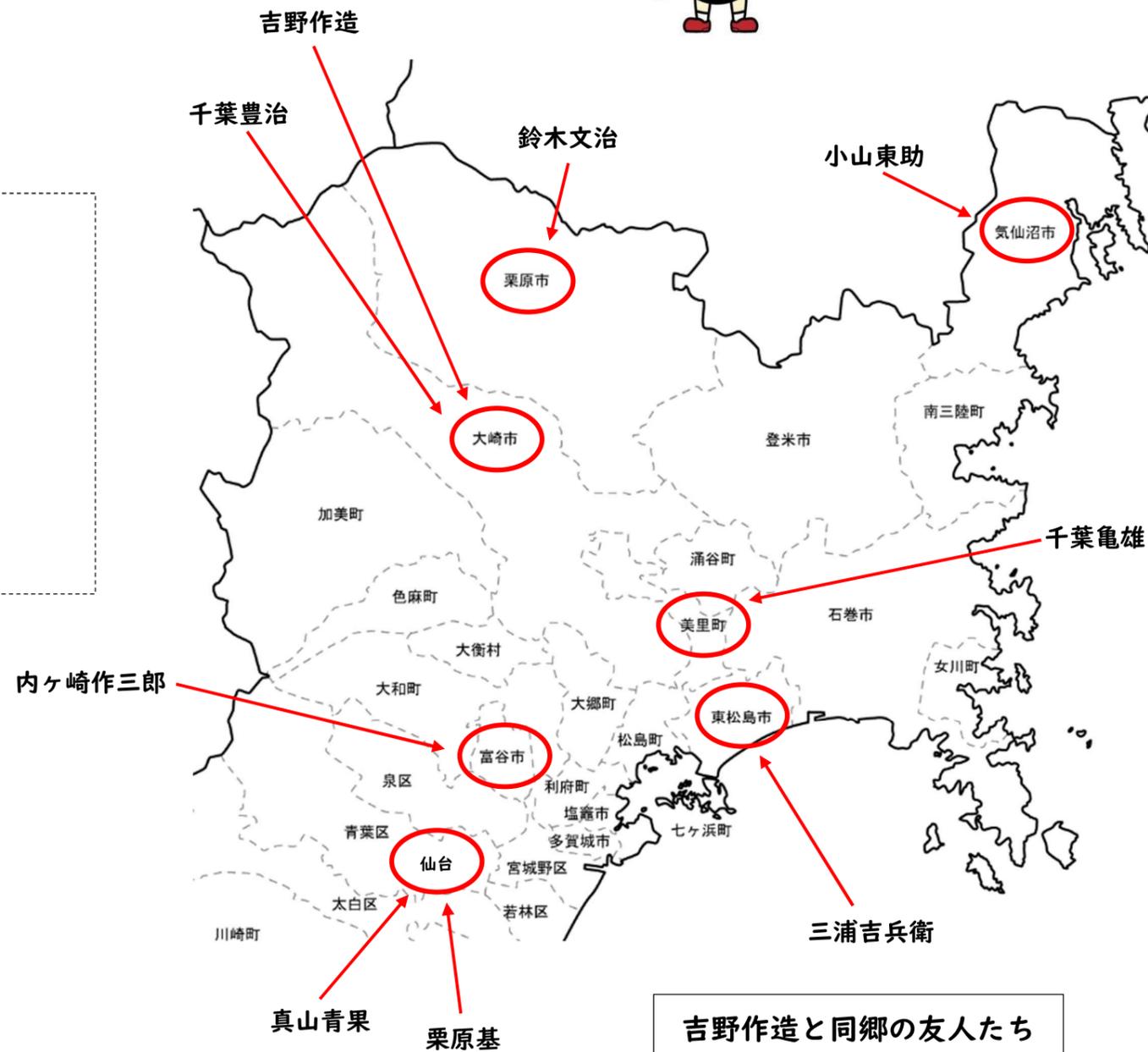
思想形成のもととなった郷土

こせんがくじん

吉野は筆名として「古川学人」を愛用したように、故郷古川への愛着を終生もち続けた。吉野は郷里を「田舎の小都会ではあるが国道筋に当る比較的繁華な宿場」とあらわし、晩年に古川での思い出をなつかしく語っている。また郷土宮城は、吉野と生涯親交をふかめ、政治の世界で活躍した**小山東助**（現気仙沼市出身）や**内ヶ崎作三郎**（現富谷市出身）、**友愛会の創設者鈴木文治**（現栗原市出身）、長らく東北帝国大学の教授を務め、「人格主義」を主張した**阿部次郎**、ジャーナリスト**千葉亀雄**など、大正時代をかたちづかった様々な人物を世におくりだした。吉野の思想も、このような土壌で培われたのである。

◇展示資料◇

- ・ 吉野作造書額「忠恕」（複製）
- ・ 扇子（吉野作造・たまの筆）
- ・ 吉野作造肖像（軸装）
- ・ ゴム印
- ・ コーヒーカップ
- ・ アームバンド
- ・ 坐机
- ・ 万年筆



*市町村名は現代のものです



Dブロック

大正時代後半から昭和にかけては、労働者や農民、あるいは女性や学生など、さまざまな人々がデモクラシーを求めて声を上げるようになりました。

啓蒙家としての吉野作造 —社会運動の種まき人として

吉野作造は生涯を通じて、啓蒙家として社会運動の種をまきつづけた。さまざまな団体に名前をつらね、運動を背後から支援した。普通選挙運動にも支援を惜まず、普通選挙法成立後は、労働者のための無産政党である「**社会民衆党**」の結成をたすけた。また、「**黎明会**」や「**文化生活研究会**」を組織し、その影響を受けた門下生は「**新人会**」を結成した。これらの組織は吉野のはばひろい人脈をつくり、その思想のさまざまな側面を発揮する場となった。



◇展示資料◇

- ・ 吉野作造『普通選挙論』1919年
- ・ 吉野作造原稿「政治に及ぼす婦人の力」(『文化生活研究』1921年所収)
- ・ 市川房枝宛吉野作造書簡、1928年2月10日[複製]
- ・ 吉野作造『議会制か独裁制か』1927年
- ・ 吉野作造『日本無産政党論』1929年
- ・ 吉野作造原稿「私の文化生活観」(『文化生活』1921年7月所収)
- ・ 吉野作造原稿「家庭と科学」(『家庭科学講座』1927年9月所収)

民本主義のひろがり

—黎明会と新人会

1918年(大正7)11月の浪人会との立会演説会におけるデモクラシーの勝利をきっかけに、「頑迷思想の撲滅」を目的とする民本主義思想の啓蒙団体「**黎明会**」が結成された。主要メンバーは、吉野、**福田徳三**、麻生久、新渡戸稲造、今井嘉幸ら進歩的な考えを持った人々が多く、**与謝野晶子**も名をつらねていた。おもに講演会と『黎明講演集』の発行をおこない、普通選挙の実行、軍事力にうったえた中国・朝鮮政策の撤廃などを主張した。この黎明会の源流となった運動には、大学を国民に開放する活動団体「**大学普及会**」があった。

立会演説会の余波は学生にもおよび、東京帝国大学の**赤松克麿**、**宮崎龍介**、石渡春雄は「**新人会**」を結成し、啓蒙活動や普通選挙運動に参加した。吉野も新人会に対し声援を送った。

すべての人に選挙権を

—普通選挙運動

1918(大正7)年におこった米騒動をきっかけに労働運動が高まり、普通選挙要求もさかんになった。吉野はこの運動を積極的に応援した。1918(大正7)年11月には門下生を集め、普通選挙研究会を結成した。1919(大正8)年には『普通選挙論』を刊行し、運動に理論的基礎づけをあたえた。そしてついに1925(大正14)年、悪名高き治安維持法とともに**普通選挙法**が成立した。こうして25歳以上の男性はすべて選挙権をもつことになった。

また、普通選挙運動では女性たちも参政権をもとめて声をあげた。吉野は政治学の立場から男女の平等をとえ、政治への女性のもつ力を評価し、多くの婦人雑誌に政治や社会問題の文章をのせて積極的に女性の社会的地位の向上や啓蒙につとめた。

④ 社会運動家としての活動

民衆のための政党づくり

—無産政党運動

普通選挙法が成立すると、労働者や農民のなかには、自らの利益を実現させるための政党を結成しようとする**無産政党運動**が始まった。

吉野は1914(大正3)年より、**鈴木文治**によって始められた、日本最初の労働運動の団体である**友愛会**を支援していた。無産政党の動きに対しては、**安部磯雄**や**堀江帰一**とともに**社会民衆党**の結成をたすけた。新しい政治の力となる無産政党に大きな期待をもっていたからである。また一方では『**無産政党の辿るべき道**』、『**日本無産政党論**』などで、民衆が政党にくみこまれ、政治が固定化することへの危惧を表明したり、「専制」的な政党のあり方に対する批判もおこなった。

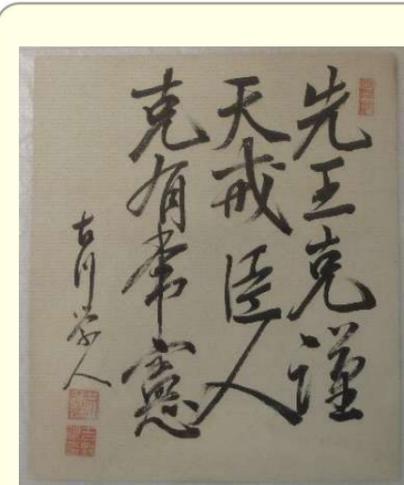
真に文化的な生活とはなにか

—文化生活研究会

1920(大正9)年になると、**森本厚吉**、**有島武郎**とともに吉野は、第一次世界大戦後にさかんになった女性の社会進出をふまえて、科学的で新しい生活のしかたを提唱する通信教育団体「**文化生活研究会**」を結成した。1923(大正12)年5月には「文化普及会」と改称し、生活改善運動をすすめ、日本最初の集合住宅のひとつ「**文化アパートメント**」を建設した。講師として通信教育双書『文化生活研究』に「**政治を及ぼす婦人の力**」を連載していた吉野も、この文化アパートメントの一室を事務所として利用していた。月刊雑誌『文化生活』では、ロシアの文豪トルストイや谷崎潤一郎についての文学論や、有島武郎の自殺の際の追悼文など、ほかの雑誌にはない吉野の文章に接することができる。

また伊豆の畑毛温泉に、平等で共働の精神にもとづく温泉つき別荘地「**学士村**」を計画し、ゆとりある文化生活の実践を模索した。

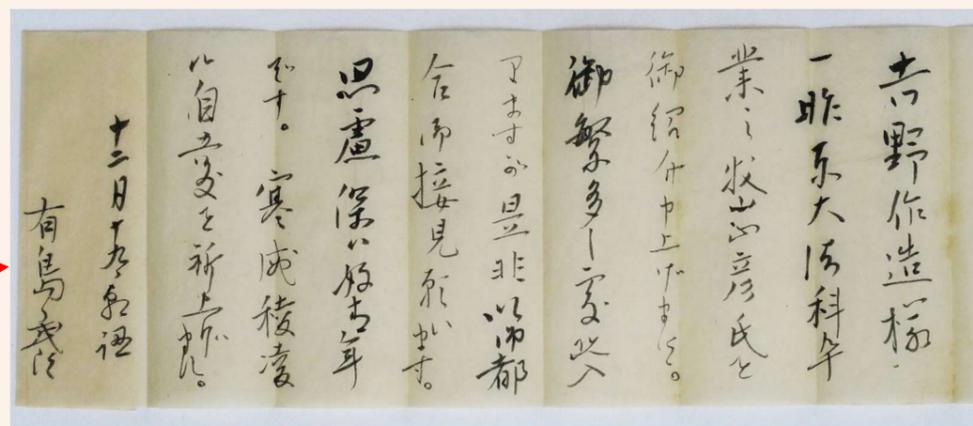
ピックアップ資料②



吉野作造色紙

「先王克謹天戒 臣人克有常憲」

『書経』(尚書)「胤征篇」の一節。「先王克く天戒を謹み、臣人克く常憲あり」と読み下します。「先王」とは堯や舜のような昔の優れた王のことを指します。先王は天の戒めを謹んで守り、臣下の者たちは決まったおきて(法)に従った、という意味です。吉野の教え子で娘婿でもある赤松克麿の旧蔵品。



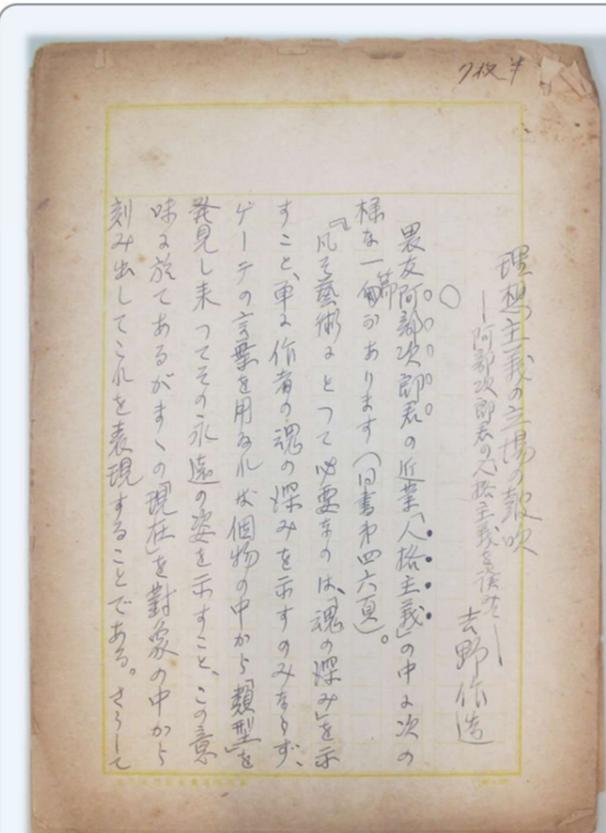
吉野作造様
一昨東大法科卒
業之牧山正彦氏を
御紹介申し上げます。
御繁多之処恐入
りますが是非以御都
合御接見願います。
思慮深い好青年
です。寒威稜凌
御自愛を祈上げます。
十二月十九日朝認
有島武郎

吉野作造宛有島武郎書簡

1921年(大正10)12月19日

吉野家に保管されていた資料の一つで、吉野と共に文化生活研究会を設立し活動した作家有島武郎(1878~1923)の書簡です。内容は東京帝国大学法科卒の青年牧山正彦を紹介するもので、牧山自ら持参しています。牧山はのちに草間平作の筆名で翻訳家として活動し、ドイツの社会主義者ベーベルの『婦人論』、スイスの法学者ヒルティの『幸福論』などの邦訳で知られています。

* 浮島になっているガラスケースでは、吉野作造や関係人物の直筆資料、その他重要資料を多く展示しています。



吉野作造原稿「理想主義の立場の鼓吹—阿部次郎君の「人格主義」を読んで」(『文化生活』1922年9月所収)

東北帝国大学でも教鞭を執った哲学者・阿部次郎(1883~1959)の著作『人格主義』を書評した吉野の原稿。芸術とは永遠の理想を現実世界の中に見出すものだとして阿部が論じたことについて、プロレタリア文学の流行などにより理想主義の思想が劣勢になる中で、阿部の著作は大きな価値があると絶賛しています。



◇展示資料(テーマ展示:吉野作造と同時代の人々)◇ **Pickup!** 吉野作造色紙「先王克謹天戒 臣人克有常憲」 / 吉野作造色紙「人影在地仰見明月」 / **Pickup!** 吉野作造宛有島武郎書簡、1921年12月19日 / 室谷鉄腸宛吉野作造書簡、1925年11月3日 / **Pickup!** 吉野作造原稿「理想主義の立場の鼓吹—阿部次郎君の「人格主義」を読んで」(『文化生活』1922年9月所収) / 中島半次郎宛吉野作造葉書、1912年6月29日 / 吉野作造宛斎藤七五郎書簡、1921年10月6日